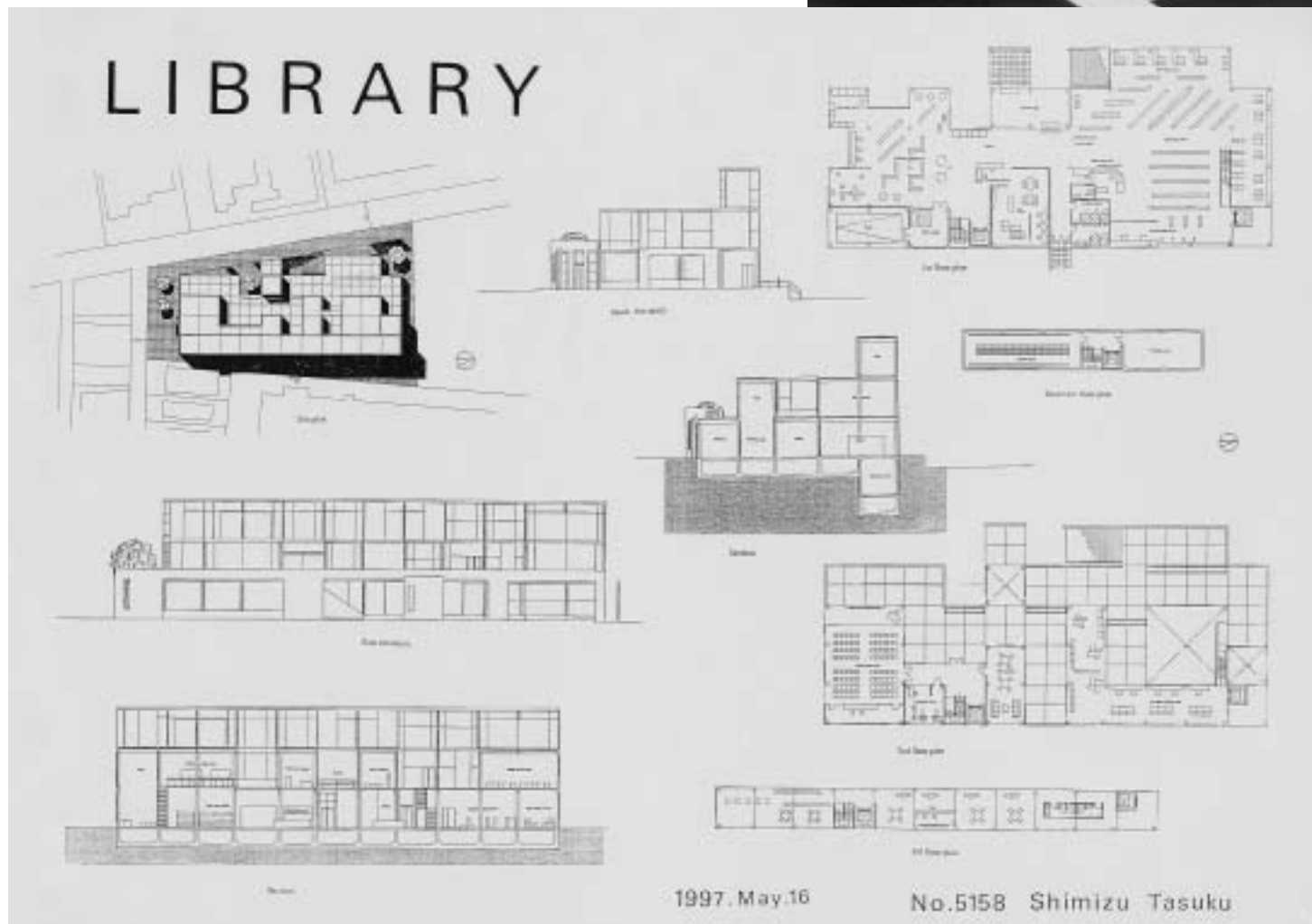
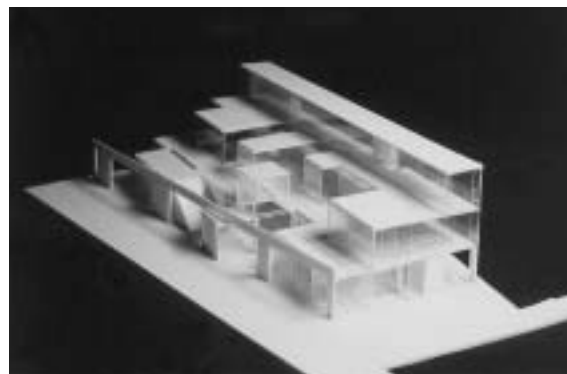


清水 扶



建築設計製図Ⅲ

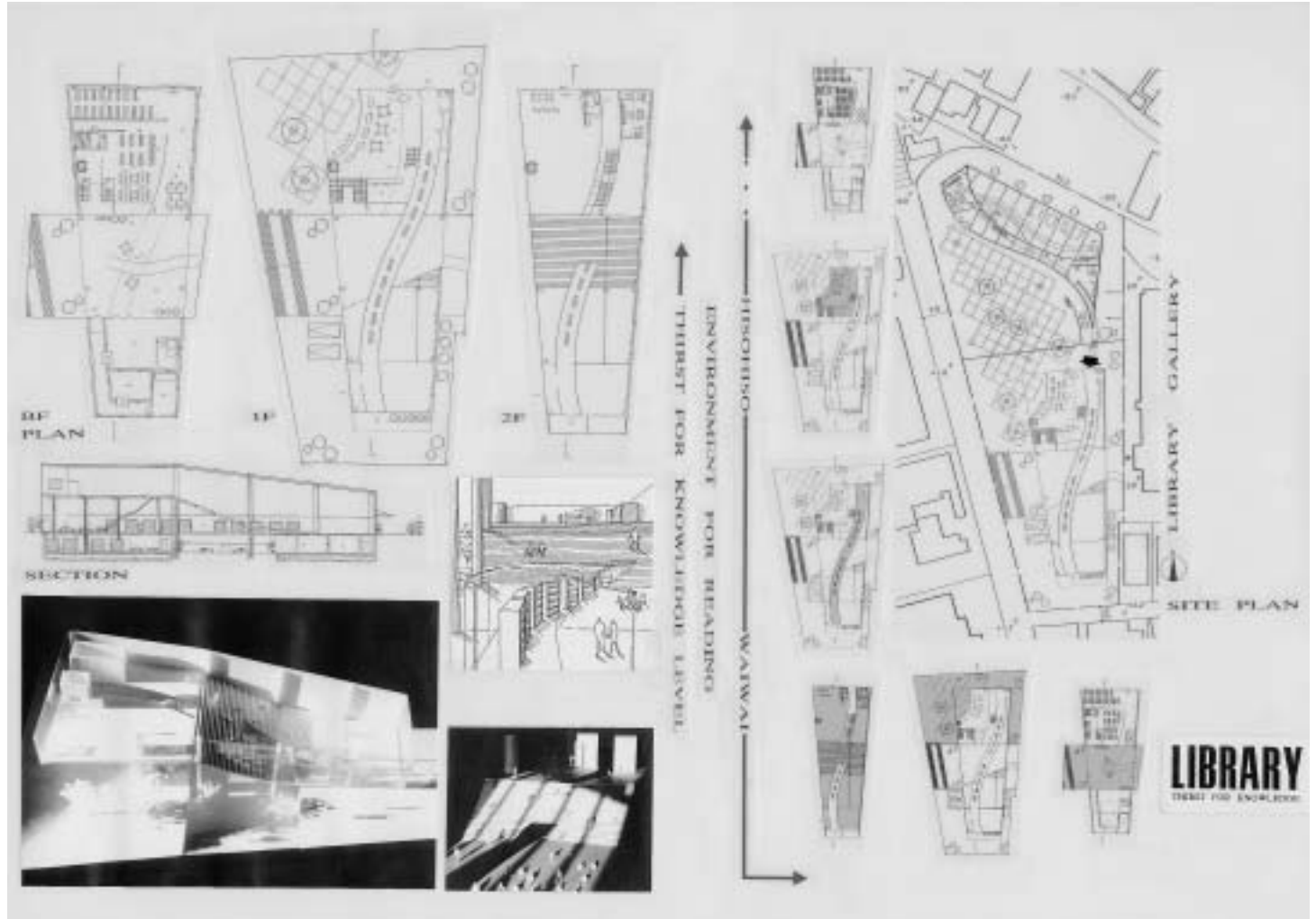
第1課題 ライブラリー

3年2組

担当=
高宮 真介
本杉 省三
飯塚 章
小川 守之
アストリッド クライン
曾我部 昌史
西野 善介
横河 健

清水 扶

敷地の背景からその街並みを意識し、スパン5m立方体を基本として建物を構成した。又、西側(道路側)から1F、2F、3Fとなるように建物を配置し、建物と周辺との調和を試みた。機能として1Fに一般閲覧コーナー、児童コーナー、事務室、2Fに視聴覚室、レファレンスコーナー、コンピュータ室、テラス、3Fにカフェ、B1に閉架書庫、機械室を設けた。本という1つのメディアの連続性と木陰のようなイメージから、アイレベルの視線が当たる部分を柱のみのガラス張りの開放的なものとし、その中で読書する人たちの風景が浮かびあが



り、都会の公園にいるような空間を試みた。

指導=高宮 真介

本郷の菊坂の谷間を挟んで、この辺りは古い住宅が今なお特異な佇まいを残している。そのような街並みも、春日通りや本郷通り沿いの開発によって漸次浸食されてきていて、この敷地は丁度そんな地境にある。この歴史的な佇まいのスケールに呼応するために、5mキューブという立体のグリッドプランによって建築を構成しようという意図が成功している。またこれからの地域図書館は、コンビニ的な気軽さで情報交換ができる場所というイメージが益々強くなっ

てくると思われる。そういう状況を表象するかのよう、透明性とかが軽さが素直に表現されていて好感もてる。一方、グリッドによる架構は、得てして単調でつまらないものになりがちだが、この作品では立体的に光を取り入れる装置だとか、最上階に便益施設をリニアーに配置するなどしてメリハリの効いた建築にしている点もいい結果をもたらしたといえる。

山寺 美和子

現在、都市における情報のネットワーク化が進行し、それに伴い、情報の蓄積、公開を主目的にした図書館の役割は徐々に変

化している。それは、社会構造が変わり、コンピュータが普及することによって、場所からの脱却が行われているからである。つまり、今までの図書館の基本的機能が個人で担えるようになり、もはや、図書館は情報収集のみの場ではなく、必要不可欠な、個人の性質、言い換えれば知りたいと思う感情育成の場、知識欲を刺激する場であると言える。人との交流を通して情報を得、また本そのものを見ることで興味を持つような空間を要素とする。具体的には、大きなオープンスペースを設け、様々な催しを行う。また、本を見通せるような開架にし、通道的な存在にす

る。さらに、場の雰囲気や段階的に変えることで、個人の知識欲及のニーズに合ったものにする。

指導=横河 健

本課題は、公共建築としての図書館機能を根本から問い直し、敷地の特性を含めて、地域に対しての様な貢献があり得るかが問われている。山寺案は、暗く閉じた従来の定形な図書館から脱却し、可能な限り開かれたプログラムを持ち、視覚的にもオープンな外部とのつながりも立体的に考えられている。むしろ地域交流施設としての性格の方が強いのであろうか。S

字にゆるくカーブを描く開架書庫では、ゆったりと動く人々の姿が上階や下階から、さらには前面道路からも見ることが出来て、互いにその動きを楽しむシンクエンスの建築となっている。住宅地に隣接したこれからの地域図書館としては、このような性格がより強くなってゆくのであろう。その意味で当案はその方向を示している評価できる。しかし、屋根の形態も不明確であるし、ストラクチャーの考え方や設備の考え方が欠落したまま提出されていることが気になる。プログラムの面白さ以上に建築として整合させていく訓練の時間を惜しんではならないことを本人の為につけ加えたい。